

運命のお話 ~ Tales of Destiny ~

…今から数えておよそ100年前、この地で激しい大激戦があったと言う。命ある剣、「ソーディアン」を駆使した、人と、天上人の最後の生き残りとの戦い。その戦いは熾烈を極めたものの、人側は天上人の王を倒すことに成功する。

たくさんの命の失われたこの戦い…。その中に愛するものを護るために、自ら散っていった一人の少年がいた。

漆黒の長い前髪がパープルブルーの瞳にかかる、誰もがため息をついてしまうような美少年。セインガルドの客員剣士だとは思えないような華奢な身体。…まだたったの16歳の少年が、たった一人で自らの運命に立ち向かっていった話。

もう遠い昔の話だ。…知っているものはあまりに少な過ぎる。ダリルシェイドの北の丘、『Lion・Magnus』と彫られた石以外、誰も知っているものはない、…はずだった。

しかし…運命はまだ、彼に厳しい試練を与える。

『…暗い。ここは暗い。なにも見えない、何も無い…。何も感じない……。これが、死なのか？僕が死ねば、すべて解決するって……。本当に死ぬとこんなに安らかになれるんだな……。』

それに、ここにいればもうずっとひとりじゃない。ずっとシャルと一緒に…』

Chapter 1, ダイクロフト

マーシェとライルは音も無く遺跡の中を歩いていった。

あらゆるところに亀裂が入り、壁に触れるとぼろぼろと崩れていく。おまけに半分以上土に埋まってしまっているため、いつつぶれてもおかしくない状態なのだ。床は床で苔が一面に生えてしまっている。…これは100年前この遺跡が地に落ちたとき、海の上に落ちたために、浸水して生えた苔の名残なのだろう。そのせいで、とても滑りやすくなっている。

マーシェ・ダーニルとそのパ・トナー、ライル・ライラスはセインガルド王国の第一級のトレジャーハンターなのだ。第一級のトレジャーハンターとは、いわば国のお抱えトレジャーハンターで、国宝級であると考えられるお宝の発掘を専門としている。一般のトレジャーハンターでは入ることの出来ない危険な遺跡に入ってとても貴重な宝を発掘する(発掘した品は国に返さなければいけないのだが)。2人がこんな危険な場所にいるのはそのためなのだ。

「…本当にこんな場所に何かあるのかな？」

先頭を歩く赤い髪の少女が振り返らずに小声で問うた。

彼女がマーシェ・ダーニル。17歳。天性の剣の才能をもち、この若さで王国に登用された。チャームポイント真っ赤な瞳。そこそこの美人ではあるものの、冷たい性格なのが玉にキズ。

「何も無かったら困るな。俺たち成功報酬なんだから」

マーシェの後ろを歩く少年が疲れた口調で言い返した。

彼はライル・ライラス。19歳。彼はこの年齢にして、考古学の博士号を得ているため、マーシェのパートナーとして登用された。勉強は出来るがスポ - ツは全く出来ない。考古学は出来るが戦いは全く出来ない。彼を護るのもマーシェの役目だが、彼がいないとマーシェは遺跡発掘が出来ない。まさに持ちつ持たれつ、なのだった。

「ここっていったい何があったところなの？今まで見た遺跡の中で一番めちゃくちゃに破壊されてるよ」

天上の亀裂からばらばら落ちてくる土をよけながらマーシェが問うと、

「そりゃそうだ。100年前の戦いはここで終結したんだからな」

ライルが得意げに言う。

「…100年前の戦い、ね」

ぜんぜん歴史に詳しくないマーシェでも知っているほど、その戦いは有名だった。

「天上人の王とソーディアンを持った人間たちが最後に戦った場所。永久エネルギー機関「神の眼」をかけた戦い、だったはずよね？」

「大正解。マーシェにしてはよく出来たな」

…そう。ここは天空要塞「ベルクラント」の残骸だ。100年前の戦いと、4人のソーディアンの勇者については5歳の子供でも知っている。いまさら解説を加えることも無いだろう。

「でもそのときソーディアンの命と引き換えに神の眼も破壊されたんでしょ？何でそれをいまさら発掘なんてするの？」

マーシェとライル、2人の今回の発掘指令は神の目の残骸とソーディアンの死骸の発掘だった。

「100年前は今とは比べ物にならないほど、文明が発達していた。…その残骸でもいいからほしいんじゃないのか？」

マーシェはふうんと鼻を鳴らしたただけだった。

マーシェにはそんなことはあまり関係なかった。ただ無事発掘を終えて報酬が得られればそれでいい、それが彼女だ。100年前の戦いも今は死んだソーディアンも全く自分には関係ない。…そう、思っていた。

先に進むにつれて、だんだんモンスターの数が減っていくことに気が付いた。

「…マーシェ。このへんで、最後の決戦があったみたいだ。見てみる、…あれ」

ライルの声にはっと顔を上げ、前を見た。

あたりに漂っているのは捕らえどころの無い不思議な空気。自分たちに憎しみを向けているような…ここに立っていることが絶えがたいような空気だった。その空気の真ん中に跡形も無く崩された水晶体らしきものが見えた。

「あれが神の眼だ」

正確には「神の眼だったもの」だろう。100年前の戦いでソーディアンによって破壊されたまま放置さ

れていたのだろう、もう今では見る影も無い。

「…これが？」

マーシェは神の眼の残骸の発するいやな空気をものともせず、かがみこみ、ひとつのかけらを拾い上げた。今は何の効力ももたないただの結晶ののしか見えない。

「ほら、これがソーディアンたちだ」

ライルが周りに散らばっているぼろぼろのさびた剣を指差しながらいった。

「ディムロス、アトワイト、クレメンテ、イクティノス…それにベルセリオス。やっぱり文献のとおりだ」

満足そうにならずくと、ライルはさらに説明を付け加えた。

ディムロス、アトワイト、クレメンテ、イクティノス…先に言った4人のソーディアンたちは地上人側につき地上を破壊から護った。神の眼を命と引き換えに破壊したのもこの4人だった。しかし、かつては仲間であったはずのソーディアン、ベルセリオスの裏切りによって、平安が乱されたのだと。

「じゃ、あたしたちはこれを拾っていけばいいわけ」

ライルの説明も、マーシェには馬耳東風のような感じだった。ぼつんと言って、足元に転がるソーディアンの残骸に手を伸ばしかける。

…牙を思わせる、とがった黒い刀身。

(100年の間ずっとここに…?)

100年という長い年月を経ても朽ち果てずにずっとここにいたのだろうか…。そう考えると、このソーディアンが死んでいるようにはとても思えなかった。

黒い刀身はまがまがしい暗い光を放ち、絶えず生命エネルギーを発しているようにさえ見えた。

「ねえ…ライル、これって本当に死んでるの？」

「ん？」

マーシェがひとさしの剣に戸惑っている間にライルは他の4つの剣をすでに拾い集め、そのうえ神の眼の残骸まで回収し始めていた。

「めずらしいなあ。お前が仕事に戸惑うなんて。心配すんなよ。確かにソーディアンは核であるコアクリスタルが無事な限り生きる。…けど、ここにあるのはみんな死骸だよ。死骸が怖いわけ、…ないだろ？」

「さっき4つのソーディアンが命と引き換えに神の眼を破壊したって言わなかったっけ…」

「ん、なんか言ったか？」

「…別に、なにも言ってないけど。(それならこいつ、生きてるんじゃないか…?)」

なんとなく腑に落ちない様子のマーシェ。どうにも、自分の勘に反することは信じない性質らしい。理論好きのライルとは全くの正反対だ。

「あたし、ちょっと奥見てくる」

黒い刀身の(なんとなく)邪悪な感じのするソーディアンはライルに任せ、自分はさらに奥を見に行ってみることにした。

ぱきぱきと、粉々になってしまっている神の眼を踏みつけ、絶えず上から降ってくる砂やホコリを避け

つつ、足元に生えている苔で足を滑らせないように慎重に奥に進んだ。やはり、ここの破壊が際立って著しい。

最終決戦があった部屋から奥の部屋は、ほとんど無傷の状態だった。今まで見てきた遺跡の中で、一番老朽化と破壊が進んでいたのはここだったが、…その反面、この部屋は今まで見た遺跡の中で一番保存の度合いがきれいな様だった。

なんのしかけもない石の扉を押し開け、くぐり抜けると、そこはぼんやりと薄明るかった。…とはいってもそれは外の太陽の光と比べたのであって、実際、部屋の中を見渡すには十分だった。

「…！！！」

部屋の中に入った途端、マーシェは目を見開いたまま固まってしまった。

…部屋の中にあったのは大人が一人では入れるくらいの大きさのガラスで出来た大きな筒だった。その筒からは何本も何本もコードが延びていて……それ以前にマーシェの目を引いたのはその筒の中身だ。

闇よりも黒い、漆黒の髪が半透明の液体の中で揺れている。耳に光るのは金色のピアス。髪と同様頼りなげに揺れている。長いまつげ…、目を硬く閉じていても分かる。目を開けば彼がものすごい美少年であろうことを。…彼は赤いマントを羽織った姿で母親のお腹の中にいる胎児のようにひざを抱え、うずくまった体勢のまま、ガラスの筒の中で不規則に上下していた。

「…」

当然ながら突然のことに絶句してしまうマーシェ。ガラスの中の『彼』をぼんやりと見つめたまま、動けずにいた。

『…ちゃん…ぼっちゃん…ぼっちゃん…』

そのとき初めて、足元に転がるひとさしの剣に気がついた。スマートで切れ味のよさそうな、どことなくレイピアに似た細身の剣。

…その剣から『ぼっちゃん』と言う声が発せられているように聞こえるのは気のせいだろうか。しかしさっきの黒い刀身の剣とは違い、いやな感じは全くしない。ただ、細々と声が聞こえるだけ。

『ぼっちゃん。…大丈夫ですよ。ぼくがついてます。…ぼっちゃん、もう何も心配することはないんです…』

剣を拾い上げると、声はもっと近く…頭の中で響くようになった。さすがのマーシェもこれは剣が話していると思わざるを得なくなってしまった。そして、剣が呼びかけているであろうガラスケースの中の彼を見やった。…目覚める気配は無い。

「おーい、マーシェ！そんなところで遊んでないで、ちゃんとこっち手伝ってくれよ〜」

「！！」

『！！？』

剣とマーシェはほぼ同時に我に返った。…剣のほうは反応は過剰だったが。

「ライル！見て、この剣…。しゃべるわ」

部屋に入ってきたライルは、最初マーシェが入ってきたときと同じようにガラスの筒に驚き、…それか

からマーシェの持つ剣に興味を示した。

『…どうしてこんなところに人間が…。ダイクロフトは地中に沈んだ、…沈めたはずなのに…』

同時に剣の驚愕の様子が頭に流れ込んでくる。

…聞きたくも無かった。マーシェは剣を無視することにした。

「この剣…、ここにあったのか？」

震える手で剣を受け取り、かすれた声で問うライル。

「これ…多分ソーディアン・シャルティエだ…しかも、まだコアクリスタルが生きている…。これは生きてるソーディアンだ！」

こいつは100年前の戦いでは天上人側に加わったんだよな、確か。それで…」

ライルに渡してしまってもなお、剣からは声が絶えずに聞こえてくる。絶望と、悲しみいっぱい声。

『…なにを、いってるんだ…？あの時、僕とぼっちゃんとは仕方なくヒューゴに…ああ、ぼっちゃん、…どうしてぼっちゃんには安やぎが訪れないんだ…』

「神の眼の破壊には加わらなかった。…そうか、それでこいつは無事なのか…」

ライルは一人、誰も聞いていない解説を続ける。

「だとしたら、なんでこいつのマスターもここにいるんだ？」

再びガラスケースの中の彼に目をやる。つられてマーシェも彼を見た。…しかし当然と言うべきかやはり彼は動かない。

「…ライル。こいつが生きていようと、関係ないわ。早く仕事終わらせて帰るわよ。来週からまたフィッツガルドの方に行くんだから。いつまでもここで時間食うわけにいかないでしょ」

つい、剣の方を見てしまった。聞きたくないはずなのに、ついつい気にしてしまった。…こんなこと、マーシェにはとてもめずらしい。…人の言葉を話す剣を気にするなと言うほうが無理かもしれないが。

『…』

しかし、剣…シャルティエからは何も聞こえてはこない。マーシェが聞いていることに気付いて黙ってしまったのだろうか。

「わかったよ。…研究は帰ってからでも出来るしな。じゃ、俺は神の眼の残骸をもう少し拾ってくるよ」

「あたしは…こいつをもう少し調べてみる。出せるかやってみる」

…もう生きてはいないだろうけど。

付け加えようとしてやめておく。代わりにガラスの筒をコン、と軽くたたいた。

「その剣一応ここに置いといてくれる？」

「…ふう」

この仕事は今まで受けた仕事の中で一番厄介な仕事になりそうだった。いままでの、遺跡の中に落ちている歴史の残骸を拾うだけの仕事とは大違いだ。今回は発掘対象がシャルティエのように生きているのだ。

そして、あからさまにあやしい筒の中の少年。

少年を中から出して運ぶべく、筒の周りの装置を調べようとかがみこんだとき。

『ぼっちゃん！！目覚めてください！！そこにいると・・・また安らぎが奪われてしまう・・・！
今度こそ自分の手で幸せをつかむんですよ！！大丈夫、ぼくがついてますから・・・！！』

「！！」

それまで沈黙を守っていたシャルティエがいきなり『ぼっちゃん』に向かって声を張り上げた。
マーシェが見ている前で、筒の中に確実に変化が起こっていく。

ガラスの筒を満たしている半透明の液体がこぼこぼ音を立て始め、びしびしと嫌な音を立て始めた！
ガラスにひびが入っていくのを見て、(割れる！)と思った時には反射的に身体が伏せていた。

ばりいいん！！

ひどく耳障りな音を立てて、ガラスの筒が砕け散り、中の液体も部屋中に飛び散った。マーシェはガラスの破片は刺さらなかったものの全身に液体を浴びてしまった。身体の凍るような冷たい液体だ。

「あんたがやったの！？」

答えが返ってくることは期待せずにシャルティエに怒鳴りつけ、跡形も無く砕け散ったガラスの筒を見た。

・・・その中心に彼はいた。

さっきまでひざを抱えて眠りについていた少年が、中心に立っていた。その瞳には生氣と呼べるものは全く無く、ただただ虚無と絶望と悲しみが漂っているだけ。肌も全くの蒼白で、今にも死んでしまいそうだ。

「・・・コク、ハ・・・？」

聞き取りにくい不協和音のような声が、彼の口を突いて出る。

『ぼっちゃん！！』

シャルティエが歓喜の声をあげる。・・・しかし、それもむなしく、彼の身体はバランスを崩しぐらり、と前に倒れかける！

『ぼっちゃん！！』

再度、シャルティエが叫ぶ。今度は、驚愕の叫びだったが。

シャルティエが叫ぶのよりも一瞬早く、マーシェは動いていた。手を伸ばして、彼を受け止める。見た目は華奢な割に以外に重く、マーシェも倒れかけるが、さすがにガラスの破片の中に倒れるわけには行かず、どうにかこらえた。

(あったかい・・・？)

さっきまで、あんなに冷たい水の中につかっていたというのにも関わらず、彼の身体は人肌のぬくもりを持っている。生きていないだろうとばかり思っていたマーシェはすこし、驚いた。これでは、生きている人間と変わらない。

「・・・ねえ、答えてよ。彼は100年前の人間なんでしょ？なんで、生きたままここにいるの？」

抱きとめた彼をガラスの破片の無いあたりにそっと横たえると、置きっ放しになったままのシャルティエを拾い上げ、声をかけてみる。

湧き上がる好奇心を、とめることは出来なかった。

一瞬の沈黙を置いて、シャルティエが話し出す。最初と同じ、頭に直接話しかけるような感じだった。

『…キミは、マスターじゃない…なのに、ぼくの声が聞こえる…。』

100年の間に、人間はずっと進化したんだね…』

「進化？一体どういうことなの？」

『…100年前の人間の方がぼくらソーディアンの声が聞ける人間がはるかに少なかった、ってことだよ』

続けて、シャルティエはソーディアンの声を聞くことができるのは人間誰にでも眠っている才能である、と言った。

『キミはマスターでないのに声が聞こえる、それはその才能を開花できる人間が世の中に出てきたってこと…』

「うわぁ～これはまた、派手にやったなぁ…。」

ガラスの破片を踏み分けながら、ライルが戻ってきた。両手に下げた皮袋には神の眼の残骸や朽ち果てたソーディアンたちが入っているのだろう。

『ぼっちゃん、リオンぼっちゃんは生きてる…ぼくが生きれるようにしておいたから…』

「ライル、彼は、生きてるわ」

シャルティエの言葉の途中でマーシェは立ち上がった。そしてシャルティエをさやごと腰のベルトに下げ、彼…リオンのもとへ向かう。

「なんだって!？」

シャルティエの言うとおり、リオンは相変わらず蒼白な顔をしていたが、規則正しく胸が上下している。ただ眠っているだけのようだ。

「すごい大発見だぜ！100年前の人間に、コアクリスタルの生きたソーディアン！！」

歓喜の声を上げ、あさってのほうに向けてガッツポーズをとるライル。

本当に彼の思考は考古学で固まってしまっているらしい。マーシェは思わずため息をついてしまった。…この考古学熱が裏目に出なければいいが。

「…で」

やけにニヤニヤした顔で、マーシェの前に回りこんできた。…こういう顔をするときはなにか裏があると相場が決まっている。

早くも心配が当たってしまい、マーシェは頭を抱えなくなった。

「…なに」

「こいつらさあ、…王国に報告すんのやめない？」

「(来ると思った!)やめない。そんなことしたら資格剥奪じゃすまないわよ。」

あたし、犯罪者になりたくないもん」

マーシェの言うとおり、マーシェたち第一級トレジャーハンターは王国の管轄の下にあるため、発掘したものは必ず届け出なければならないのだ。発掘物の隠ぺいは重罪で、隠ぺいしたものによって罰則は変わるが、資格剥奪、王国追放、財産の没収、最高では懲役刑にまで処される。

マーシェはそんなのはまっぴらごめんだ。いつもなら腕づくでもライルに言うことを聞かせる。(今までも何度かライルが隠ぺいを持ちかけたことがあるのだ)。

「なっ？本当に頼むよ。絶対ばれやしないって…」

(…なに考えてるの？…だめ。絶対だめ。ライルの言うことなんか聞いちゃ、絶対だめ…)

頭ではわかっている。発掘したものを隠ぺいするなど…。しかし、心が言うことを聞かないし…。いや、心のほうがずっと正直というべきか。

(でも、この剣と彼は生きてる。…怪我人を家に連れて行くことくらい…)

「…あのひとが元気になるまでね」

「よっしゃあ～～！！」

マーシェが言うとライルはガッツポーズをとって飛び上がった。

「じゃあ、早く運ばないと…。ライル、彼…リオンだっけ？おんぶしてよ」

皮袋をマーシェに渡すと、ライルは元気よくリオンを担ぎ上げた。…これがいつものライルかと思うとまたため息が出そうになる。ライルの調子のよさにはいつも閉口させられているマーシェだった。

そのライルの口元に何か言い知れぬ不気味な笑みが浮かんでいるのは、マーシェの位置からは死角になっていて見ることは出来なかった。

『どうして…だろう。…ぼっちゃん…。運命ってやつは変えられないようになっているとしか…思えない…。どうして、ぼっちゃんにばかり…』

Chapter 2, カーボナイト凍結

マーシェとライルは王国からあてがわれたクレストの共同住宅に2人で住んでいる。街の北東にあるカトレット孤児院の隣りだ。

今回の遺跡はわりと遠くない位置にあったため、3日とかからずに帰宅することが出来た。

それでもリオンをほとんどの時間おぶっていたライルは全身筋肉痛で、家に帰るなりベッドに倒れこんだ。

あれからリオンも目覚めない。ただひたすら昏々と眠りつづけているだけなのだ。これではガラスの中にいたときと変わらない。シャルティエに声をかけてみても反応はない。ただ、ひどく怯えているような様子は伝わってくるのだが。…研究に使われることを怖がっているのかも知れなかった。

ライルの様子からしてもダリルシェイドに向かうのは明日以降にしたほうがいいと判断したマーシェも疲れを癒すために早く寝ることにした。

「…」

しかし、眠れない。

身体には疲れがたまって動くことすらままならないと言うのに、眠気はやってこない。羊を数える…のは全く聞かないと言うのは子供のころに実証済みだ。

闇の中に体を起こす。眠ることをあきらめたほうがよさそうだ。

今日は幸い春のように暖かい。それに窓から月がよく見える。…マーシェは外に出ることにした。

家を出て、町の中央にある噴水へと向かう。窓から見えたとおり、月がキレイだった。銀色の光で影

が出来るほどに明るい。おかげでとくに街灯の消えた真夜中のクレストを歩くことはたやすかった。

噴水の水はもう、止められていた。今は下にたまっている分しかないが、月の光を受けてそこに沈む銀貨が輝く。後ろ向きで硬貨を投げ込み、入ると願いが叶うという街の名物(?)の噴水だ。

「…」

ポケットから5ガルド硬貨を取り出し、後ろ向きになって投げ込んでみる。

…ぼちゃん。

ややあって水音。どうやら成功したみたいだ。うれしくなってつい笑みがこぼれる。

(願い事は…)

最初に浮かんだのはリオンのことだった。100年と言う長い間、眠り続けていたか細い少年。そして、リオンを心配しつつづけている、彼のソーディアン・シャルティエ。

(…そうね。早く彼が目覚めて、元気になって、シャルティエが心配しなくてすむよう…)

そのとき！マーシェの後ろで気配が動いた。らしくもなく願い事などに気を取られていたせいで全く気がつかなかった。慌てて振り返ると、細い、少女のようなシルエットが見えた。

リオンだった。

月明かりの下だと見えにくいだが、この前、初めて目覚めたときよりずっと元気に見えた。パープルブルーの瞳にもちゃんと人間の生気らしきものが見えた。…肌の色だけはまだ蒼白だったが。

「…リオン？」

「ここは」

よろめきながらマーシェに近づき、震える手で胸ぐらをつかみ鋭い目でにらみつけながら問う。声も、あの時の不協和音のような不気味な声ではなく普通の少年のそれだった。

「ここはどこなんだ？貴様、僕に何をした？僕は死んだんじゃ、なかったのか？」

矢継ぎ早な質問にマーシェも焦ってしまう。それに彼女にリオンの質問は答えることは出来ない。

「あ、あたしは、知らないわよ。あたしは遺跡であんたを見つけたから、クレストまで連れてきてあげたの！」

とりあえず答えられることだけに答え、マーシェは彼を落ち着かせた。

まだ完全に回復してようには見えないし、それになんといってもリオンは100年も前の人間だ。どんなにマーシェが説明したところで分かってくれるわけがない。

「ちょっと待って。あたしに聞くより相棒に聞いたほうがいいわよ。…今、持ってくるから」

リオンにそこから動かないよう念を押すと、マーシェは一人家にとって返した。家で話をしない、というのは筋肉痛+お疲れでぐっすり眠るライルへの気配りだ。

シャルティエを手にするると再び、頭の中で声が聞こえた。

『ぼっちちゃんの気配が…』

「そうよ、あんたのぼっちちゃん、目が覚めたわよ！君のこと待ってる。早く行こう」

シャルティエを握りしめ、小走りに噴水のところへ戻るとリオンはさっきと同じ場所で立ち尽くしたまま呆けるように空を見ていた。

『…ぼっちゃん～ん！！！！』

シャルティエの存在に気がついたリオンははっと顔を上げる。その瞬間、いままで消えそうな弱々しい光を放っていた目によりやく輝きが灯る。

…もう大丈夫。マーシェは心の中でつぶやいた。

「シャル！！」

リオンの手にシャルティエを渡すと少しだけ、こわばっていたリオンの顔が緩む。

「一体どうなってるんだ？あの時僕は、死んだんじゃないのか…？」

『ええ。ぼっちゃんは死ななかつたんです。

…覚えてますか？地下工場で戦ったときのこと』

シャルティエの声は聞こえるが、話が全くもってわからないマーシェ。100年前の話をしているのだろう。邪魔しなくなかったので、マーシェは黙って2人の話に耳を傾けることにした。

「ああ」

『あの時ぼっちゃんは負けて、島と一緒に沈んだ…。そうですね？』

「ああ」

『地下工場のとき…手加減してましたね。ぼっちゃんとは長い付き合いです。すぐわかりましたよ。』

「余計なことはいいい」

『はいはい。100年経っても変わらないなあ。…ぼくは変わらないぼっちゃんが好きですけどね』

「…シャル」

あきれたように言うリオン。どうやら2人(…というべきか)は本当に仲がいいらしい。単にソーディアンとマスターと言う間柄ではなく、ずっと支えあってきた信頼感と言うのがはたから見ているマーシェにもよくわかった。

『その後、スタンたちと戦ったのは覚えてますか？』

「スタンたちと、か…？」

眉をひそめるリオン。

しかし、100年も前のことをよく覚えているなどマーシェは思う。まるで昨日のことを話しているかのようだ。

「いや。記憶は地下工場で最後だ。その後僕はスタンたちと戦ったのか？」

『…はい。ぼくのほうにはいろいろ記録とかが流れ込んできてたんですけどね。

まず、地下工場で流されたぼっちゃんとぼくはヒューゴに拾われたんです』

「ヒューゴに！？」

『ええ。それで、ヒューゴはぼっちゃんをカーボナイト凍結を備えた生体回復装置に入れたんです。…ぼくを見張りにつけてね。もちろん、動力源は…レンズですよ。普通のものよりは大きいんですが神の眼には遠く及ばないような代物ですけどね。まああの装置を動かすには不自由しないですよ。100年でも200年でも動かせる』

おしゃべりなシャルティエを止める気もなくしたらしい。リオンは眉間にしわを寄せたまま黙って耳を傾けている。

『その後、ヒューゴはスタンたちに倒されて、ぼっちゃんとぼくはミクトランに連れて行かれた。ぼっちゃん

んを何かに使おうとしたんでしょうけどね』

「…待て、ミクトランって誰だ？」

『ああ、ぼっちゃん知らないんですね。ミクトランは天地戦争時の天上人側の王です。つまり、ヒューゴはこいつに操られていたんですよ』

「ヒューゴも、操られていたいたのか…」

『…肝心なのはその後です。ミクトランはぼくとぼっちゃんの幻影を作り出してスタンたちと戦わせましたですよ。やつらを動揺させようとしたんでしょうね…。その後ミクトランは倒され、ダイクロフトは落ち、あの一ひと…、マーシェが見つかるまでずっとカーボナイト凍結されてたってわけです。まあ、だいたいこんなところですか』

「…そうか」

リオンは、力なくうなずいた。

マーシェも今の二人の話を聞いて、なんとなく察しはついた。おそらくスタンたち、というのは100年前の戦いの際の4人の勇者たちだろう。それに敵対していたリオンは、その勇者たちによって倒され、ヒューゴとかいうのに眠らされた。そしてその後100年前の戦いの際の天上人の王ミクトランによってあの遺跡に運ばれた、というわけだろうか。細かい点はわからないが聞くわけにもいかず、マーシェは黙ってリオンとシャルティエを見る。

「…お前が、僕を見つけたのか？」

ふいに、リオンがマーシェに目を向けた。濁りのない澄んだきれいなパープルブルーの瞳は月明かりを受け、さらに輝いた。

「そう。遺跡でね」

「…そうか」

それ以上リオンはしゃべろうとはしなかった。途方にくれたような表情を浮かべたまま、噴水の水面に映る月をぼんやりと眺めている。

途方にくれたような表情…というより実際途方にくれているのだろう。戦い、傷つき、気がついたら100年も前の時間が過ぎ去っている。もう自分の知っている世界ではないと…。マーシェは自分の身に置き換えて想像してみようとしたができなかった。

『ぼくは…運命なんて信じない。信じたくない…せっかくぼっちゃんはこの世界で新しい第一歩を踏み出そうとしてるんだから…邪魔しないで欲しい…100年前あんなに辛い思いをしたぼっちゃんは…ここでは幸せになって欲しい』

Chapter3, 100年の月日

(100年か…)

マーシェとかいう女ともう一人の男が出かけた後、リオンはまだベッドでぼんやりしていた。

(僕は100年間も眠っていたのか)

女は部屋をひとつ貸し与えてくれて、朝になったら食事まで置いていってくれた。何も聞こうとせずに

最低限のことはしてくれた。…しかし、何者なのかはさっぱりわからない。

(向こうからすれば何者が分からないのは…僕のほうか)

ただひとつの安心材料はシャルと一緒にいてくれることだった。ぼんやりとして明確ではない記憶だが、眠っている間もずっとシャルが近くにいてくれたような気がする。

…しかし、これからどうしていいのかさっぱり見当がつかない。なにしろリオンが眠りにつく前に生きていた人たちはもうみんないなくなってしまうはずだから。

家もない、仕事もない、それどころか身分を証明することすら出来ないのだ。こんな状態でどうやって生きていけばいいのか。…ため息がとまらない。

『…ぼっちゃん』

壁に立てかけておいたシャルが口を開いた。

「なんだ」

『あの男…、ライルとか言う男…、どう思います?』

マーシェとかいう女はあまりしゃべらないため、どういう女かというのはよくは分からなかったが、ライルとかいう男のほうはやけに印象が強い。

「あまり、いい感じはしないな。やけに僕のことに興味がある」

今朝、リオンが目覚めるのを待っていたかのように…いや、実際待っていたのだろう…質問の嵐を投げつけた。

(なあなああんた、ソーディアンマスターなんだろ?)(神の眼って本当に巨大なエネルギー物質なのか?)(ソーディアンのコアクリスタルと、神の眼を共鳴させると、相殺するって本当か?)(100年前の戦いってほんとに天上人の王がいたのか?)(なあ…100年前って…)

思い出ただけでも頭が痛くなる。それにリオンには答えられないこともたくさんある。彼の言う“100年前の戦い”にリオンはほとんど参加していないのだから。

女が止めに入らなければ質問は永遠に続きそうな感じさえた。

『あいつは…気をつけたほうがいいです。あいつは、こわい…』

こわい?

シャルの口から出た意外な言葉にリオンはつい身をのりだす。

「こわいって、どういうことだ?」

『…とにかくぼっちゃん。出来るだけあいつに近づかないようにしてくださいよ』

多くは語らずにしっかりと釘をさすシャル。その口調はかなり真剣だ。

リオンとシャルの仲は、多くを語らなければ思いが伝わらない仲ではない。…リオンとシャルの間には長い間に培われた信頼感がある。シャルが危ないと言えば危ないのだろう。リオンは出来るだけ男のほうには近寄らないようにしよう、と思った。

…もっとも、近づかなくても向こうから寄ってきて例の質問攻めにするのだが。

「…それよりシャル」

『は、ぼっちゃん』

「これから僕たちはどうするんだ?」

一番切実な質問だった。

リオンのシャルへの問いは「100年前の過去へ帰れないか」という意味だった。

『しょうがないですけど、しばらくこの家に居座るしかないんじゃないか…』

シャルはもう100年前に帰れないと腹を決めているようだった。…永遠に近い時を生きれるソーディアンとほんのわずかな時を生きるだけの人間とでは時間に対する観念がだいぶ違うようだ。その証拠にシャルはリオンの事を心配してはいるが、100年の間眠っていたことについてはあまり気にしていないようだった。

「時間を転移する方法はないのか？」

ようやくベッドから起き上がり、カーテンを開きながらさらっと言う。さらっといったつもりだったが予想以上にシャルは反応した。

『時間転移ですって！？』

…そんなことが出来るなら…過去に帰るより歴史を変えるけどな。

リオンは100年ぶりの日の光を窓ガラス越しに全身に浴びながら心の中でそう付け加えた。

『ぼっちゃんがそんな夢物語みたいなこと言うとは思いませんでしたよ～』

「…そうだな」

物語みたいなこと。確かにそうだ。時間の流れは一定であり、その流れに逆らって進むことは出来ない…それくらい知っている。それなのにあんなことを言ったのはやはり切羽つまっているからなのだろう

『そうですよ、ぼっちゃん。ぼっちゃんは生まれ変わったんですよ今度こそ、ここで幸せをつかむために…』

やけに明るいシャル。

生まれ変わり…幸せをつかむ…？

言葉をもう一度頭の中で整理してみる。

しかし、リオンにはどう考えてもそうは思えなかった。なんというか、自分の周りで動く決して止めることの出来ない運命の歯車。…その運命に弄ばれているだけのような気がしてならない。

一方マーシェとライルはダリルシェイドに向かって歩いている最中だ。

クレストの街からダリルシェイドまでは山を迂回していかなければならないのだが、この2人は危険を顧みずに山を越えていく。このルートを取ると1日もかからずに王都に着くことが出来る。

「マーシェ、ボロ出すなよ」

見慣れた山道を歩きながら、ライルが言う。

(それはこっちのセリフなんだけどなあ…)

心の中でマーシェは思うがあえて口に出さずにこく、とうなずき

「わかってる。発掘したのは神の眼の残骸、後はソーディアンね」

後ろを歩くライルを少しだけ振り返る。その神の眼の残骸とソーディアンの入った皮袋はマーシェが持っている。彼女が労働担当なのだ。

「ああ、それなんだけど・・・、ソーディアン4本でことにしといてくれないか？」

「ソーディアン4本？」

おうむ返しに問うマーシェ。無理も無い、確かソーディアンはシャルティエを含め6本発掘されていたはずだ。リオンとシャルティエを隠すだけでもかなりの重罪なのにこの上さらに隠すというのか。

マーシェはあきれてつい足を止めてしまった。

「冗談でしょ？これ以上盗むつもり？」

「黒い刀身の剣、あったら？あの・・・マーシェが怖がってたやつ」

・・・怖がってなんか・・・言いかけてやめる。

あの剣を見た時の感じ、・・・あの邪悪な波動。あれはやはり恐怖としかいいようがない。

「あれがどうかしたの」

言って再び歩き出す。ほんの少しでも恐れている姿をライルには見せたくなかった。人に弱みを見られるのが苦手なのだ。

「あれを少しだけ研究したいんだ。だから見つけたソーディアンはディムロス、アトワイト、クレメンテ、イクティノス、の4つだけってことにしといてくれよ」

・・・ベルセリオス。

確か黒い刀身のソーディアンの名前はそういったはずだ。

神の眼を破壊した4つのソーディアンたちと一緒にあった黒いソーディアン。シャルティエは戦いには参加していない・・・、ような事を言っていたが、ならばあの黒いソーディアンは？なぜあのソーディアンだけ神の眼の破壊に加わらなかったのか・・・。

なぜかふいに嫌な予感がした。

「・・・」

リオンは無言のまま全く動こうとしなかった。

腰に下げられているシャルには何が起こったのかまったくわからない。かといって、リオンの醸し出す雰囲気からしてただならない状態だということも簡単に分かる。

・・・あの後リオンは着替え（ライルにパジャマを借りていた）マーシェの作っていった朝食に少し手をつけ（味付けが100年前と違うためあまり口に合わなかった）それから家の中に100年前の出来事を知るための手がかりがないかと探し始めたところだったのだが・・・。

ライルの部屋で一冊の本を手にとってからリオンの動きは一切止まってしまったのだった。

リオンの手に取った本は『検証・天界戦争』という本だった。

その本は100年前の戦いについて実に詳しく書いてある本だった。

“・・・今から数えておよそ100年前、この地で激しい大激戦があったという。命ある剣「ソーディアン」を駆使した、人と、天上人との最後の生き残りの戦い。その戦いは熾烈を極めたものの、人側は天上人の王を倒すことに成功する。”

その本には、リオンが出ていた。

“黒のソーディアン・ベルセリオスの手先と成り下がった時の大富豪ジルクリフト氏の長男。彼もソー

ディアンマスターであったが、父の背中を追い、天上人の手先と化す。天上人の復活をもくろむも、勇者のソーディアンチームの前にあえなく敗退。まだほんの少年だったという”

本のあるページを開いたまますでに10分は立ち尽くしている。

さすがに心配になったシャルが遠慮がちに声をかけた。

『…ぼっちゃん？どうかしたんですか？』

返事はない。

しかし、代わりにシャルのちょうど柄のあたりに、涙がひとしずく、こぼれた。

『ぼっちゃん…』

もうひとしずく、今度はリオンがシャルを下げている反対側の床に落ちた。

…違う。そんなんじゃないんだ。なのに、どうして…。

痛いくらいにはっきり、リオンの心の中の声が聞こえてくる。

ダリルシェイドに来るのはひさしぶりだった。最近遠くの場所の発掘ばかりで王都の方に来ることが極端に少なくなっていた。

マーシェは隣りで息を切らしているライルを見て

(…ごめんね)

最近近場での仕事でなかったことを心の中で謝る。事情があったとはいえ、遠くの場所ばかり希望していたのはマーシェだ。

ライルはここ、王都ダリルシェイドに将来結婚を誓った恋人がいるのだ。

なのになぜクレスタでマーシェと一緒に住んでいるかということ、理由は簡単。恋人がダリルシェイドのお嬢様と一緒に暮らすなど夢のまた夢、だからだ。なので家賃のかからないクレスタにマーシェと一緒にすんでいる、というわけだ。

「マリエールのところに行くのは仕事の後にしてね」

一応釘をさすと、ライルは悔しそうに苦笑いした。

「見てないうちに行こうと思ったんだけどなあ」

フステル家の大豪邸の脇を歩きながら城へと向かう。ライルがフステル家の塀をちらちら見ながら歩いているがマーシェは完全に無視することにした。

マリエール・フステル。ライルの婚約者は祖母の代に莫大な財産を継いだ、とかでダリルシェイド随一の資産家だ。マリエールは次期フステル家当主なのだ。…余談だが。

「今日はあだし先にクレスタに帰るから。ライルはゆっくりしてくといいよ」

「…ああ、当然！そのつもりだ」

マーシェも一度マリエールを見たことがあったが、黒い髪の古典的な美女だった。資産家の跡とりで、ミス・ダリルシェイドにも選ばれたことがあるという。そんな人間が自己中心的で考古学マニアのライルとどうして付き合っているのかマーシェの理解を超える。

…そんなことを考えているうちに、フステル家の塀の横を通り過ぎ、セインガルド城が見えて城の内部へは限られた人間しか入ることは出来ない。マーシェとライルは特別に発行されている第一級トレ

ジャーハンターライセンスを提示し、城内部へと足を踏み入れる。

そしてそのまま3階の王の謁見の間へと向かう。

セインガルド王は国の発展に労力を惜しまない王として有名だった。遺跡の発掘を推奨し、文献や資料の少ない100年前の戦いについて解き明かそうと金を惜しみなく使った。その一環がマーシェたち第一級トレジャーハンターなのだ。

そのおかげで、謎が多かった100年前の戦いも徐々に解き明かされつつある。…いや、もうその謎は解けたも同然だ。生きた証人たちがいるのだから。

ライルはリオンとソーディアン…シャルティエを発掘物として報告する気は毛頭なかった。生きた歴史の証人がいれば、今までの歴史の本はみんな書き換えられる。これからはライルが考古学の権威としてあがめられるようになるのだ。

そうすれば…マリエールとの結婚も、身分違いなどとは言われなくなるだろう。彼女が気にしていなくとも、身分の違いは大きな壁となって二人の間に立ちはだかるのだ。しかしそれもあと少しの辛抱。リオンとソーディアンを使えば、誰より自分は強くなれる。…ライルはそう確信していた。

「…ライル？ぼーっとしてるとおいてくよ」

3階への階段を上り始めているマーシェがライルを振り返っている。

「あ、ああ。今行く」

いつのまにか立ち止まってしまっていたらしい。ライルは再びマーシェについて歩き出す。

「…そうか。こういうことになっていたのか」

…リオンがこの部屋に入ってからかなりの時間がたっていた。ようやく立ち直りかけたリオンが口を開く。

『ぼっちゃん、大丈夫ですか？』

再びシャルが遠慮がちに声をかける。本を閉じ、元の場所に返すと、

「久しぶりに外に出てみようか」

と言い、外へ出た。

眠り続けていたため時間の感覚はあまり無かったとはいえ、実質100年ぶりの外だ。窓ガラス越しの光よりもっと強力な光で、一瞬目がくらむ。続いて、頬をなでる優しい風。…本当に久しぶりだ。風と光を全身に受けながら街を歩き出した。

クレスタの街、とマーシェは言っていた。クレスタの街はリオンの故郷ダリルシェイドからはさほど遠くない。行こうと思えば簡単にダリルシェイドまで行けるだろう。

…100年前のままダリルシェイドの街が残っているとは限らないが。

『いい天気ですねえ』

のほほん、とシャルが言う。どこまでも落ち込んだリオンの機嫌をとる気なのだ。そんなシャルを見てリオンの口から思わず笑みがこぼれた。

『あ、ぼっちゃんいま少し笑いましたねっ』

「笑ってなんかない」

『うそですよ。今聞こえましたよ』

「別に・・・」

剣と話すリオン。はたから見ると怪しいひとか精神異常者だ(両方一緒か) そんなリオンを道端で遊ぶ子供たちがじいっと見ている。

「ねえ、お兄ちゃん、誰とお話してるの？」

その中の一人の勇気ある少女がとことこ歩いてきて、リオンに話しかけた。

「・・・ガキは嫌いだ」

そう言ってきびすを返しそのまま立ち去ろうとするリオン。無視された少女の顔がみるみる赤くなりいきなりわっと泣き出してしまった！

するとその少女と一緒にいた子供たちがあつという間にリオンを取り囲み、いっせいに責めたてる！

「よくもユーマを泣かしたな！」

「人に話しかけられたら無視しちゃいけないんだぞっ！」

「こいつ、ゴクアクニンだ！！」

「みんなでやっつけろ～～！！！」

背が低い・・・もとい華奢なりオンの腰ぐらいまでしかない子供が5～6人、リオンの周りに詰め寄って、問い詰め、殴りかかる。

はっきり言って、うるさい上にうざったいことこの上ない。

だから子供に関わるとロクなことがない・・・。心の中でボヤクが、もう遅い。子供たちの勢いはリオンを持ってしても止められない。

『ぼっちゃ～～～ん！！？』

いつの間にか、腰のベルトからシャルが鞘ごと抜き取られていた。シャルが壮絶な叫び声を上げる(ちょっとオオゲサ)

「シャル！！」

シャルを奪った子供はそのまま走り去ってしまう。リオンは残りの子供に取り囲まれているというのに。

・・・しかし眠り続けていたとはいえ、リオンも元・客員剣士。子供に剣を奪われるわけにはいかない！なおも食い下がる子供たちを引きずるようにしてさっきの子供を追いかける。

久しぶりに外に出て、子供に大事なシャルを取られるなんて・・・全く運が悪いというか間抜けというか。リオンはシャルを奪った子供を追って角を曲がった。

するとそこは・・・塀で囲まれた大きな建物だった。門のところにつけられた表札がリオンの目を引いた。

『カトレット孤児院』

一瞬心臓がどくん、と鈍い音を立てる。

中では子供たちが楽しそうに遊んでいる。さっきの子供もこの中にいるだろうか・・・。シャルも心配だがこの孤児院の中が気になって仕方がない。ゆっくりと足を踏み入れる。

・・・さして広くない庭で4人の子供たちがキャーキャー騒ぎながら鬼ごっこをしていた。鬼に追われて

いる子供がリオンにぶつかってしまい、顔を真っ赤にして謝る。そしてまたぱたぱたと走っていった。

「なにか、お探ですか」

気がつくとも目の前に白い布をかぶった女性が立っていて、リオンに向けて優しく微笑んでいる。子供以外の人間が出てきたので一瞬リオンはひるんだが、気を取り直して、

「剣を持った子供が入ってこなかったか？」

「子供が、剣を？」

・・・この創立者の名はなんと言う？あんなの名前はなんと言う？・・・聞こうとしてやめる。聞いたところで何の意味もない。

「うちの子供かしら。・・・こちらへどうぞ」

彼女は言って、建物の中へ入っていく。リオンも素直にその後が続く。

輝きを失い、ばらばらに破壊された神の眼。そしてかつてはソーディアンであった・・・4つの剣。マーシェは皮袋から取り出すとテーブルの上に並べていった。

いつもマーシェたちは発掘したものをセインガルド王に献上するのだ。とりあえず、王の前で発掘品を引き渡し、それを後で専門家が鑑定し、報酬をきめる、という方式になっている。仕事を引き受ける時点で支払われる前金も含めるとかなりの額になる。・・・一度の仕事で3ヶ月は遊んで暮らせるくらい。

王はライルの説明にひとしきり感心し、その後2人にねぎらいの言葉を述べた。

・・・発掘物の隠べいがバレる様子は全くない。二人は謁見を終えほっと胸をなでおろした。予想以上に大きい報酬を受け取り、城を出た。

「勇者ごっこしようぜ！！」

「あ～やるやるう！あたしも入れてっ！！」

「オレスタン・エルローン！」

「じゃあオレはリオン・マグナスだ～～～」

「ずりーよーっ！ぼくもリオン・マグナスがいいー-----っ！！！」

……………？

建物に入ってすぐのホールで、子供たちが大騒ぎしているのが見えた。みんな一人一人が好き勝手なことをまくし立てているだけのため、なかなか收拾がつかなくなっているのだが・・・。

リオンはその子供たちの話を聞き、再び表情が凍りついてしまった。さっきシャルを奪っていった子供も加わりみんな「勇者ごっこ」なるものを行っているらしいのだが・・・。

その勇者、とは・・・。

カトレット孤児院のホールに建てられている石像。5人の剣を構えた男女がかたどられている。

「じゃああたしは、ルーティ・カトレット」

「え？あたし・・・フィリア・フィリス??」

「あれ？パッツ、ウッドロウ・ケルヴィンやんないの？じゃ、おれやる！！」

「ずるいよ～！オレがリオン・マグナスだってば！！」

…聞いたことのある…、もとい、絶対忘れることの出来ない名を連呼する子供たち。

シャルを持った子供が、シャルを大きく振り上げて叫ぶ！

「みろよ！本物の剣だぞ～！」

それに子供があっという間に群がった。そこで、怪我をしては大変、とばかりにさっきの女性がようやく止めに入った。泣く子供たちからシャルを取り上げ、そっとリオンの手に戻してくれた。

「お探しのものは、これですか」

『うゑ…ぼっちゃん』

「ああ。…あの勇者ごっこというのはなんだ？」

やっとのことでリオンが問うと、彼女は困ったように、うれしそうに笑みを浮かべて

「…この孤児院。100年前の戦いの時に、ソーディアンの勇者の一人がつぶれないようにしたんです。その勇者…さっきの子供たちの「ごっこ」に出てくる「ルーティ・カトレット」ってひとなんですけどね、そのひともこの孤児院の出身で…。

戦いが終わった後、自分のお金で立派な石像を建てたんです」

そう言って、石像を指差す。

「それ以来、この孤児院の子供たちはみんな勇者ごっこをして遊ぶようになったらしいんです。ずっと受け継がれてる遊びらしいんです。…わたしも聞いただけなんですけどね」

石像の一番右…一番背の小さい少年剣士。それは30センチほどの大きさもないが、どこから見てもリオンだった。マントも、ブーツも、白いタイツも…。きちんとソーディアンまで持っている。そして、そのミニチュアリオンの下には“ソーディアンの勇者、リオン・マグナス”…。

『これは…。あの、ルーティが？』

「だろうな」

そうとだけやっというと、リオンはシャルを再び腰に差し、建物の出口へと向かう。女性がまだ何かいっているようだが、聞こうともしない。

…リオンが出て行った後でラッティ・カトレットは頭を包んでいた白い布を脱ぎ捨てた。そしてさっきの少年の出たほうを見る。

「このあつたかいのにマント。それに、剣なんてぶっそうねえ」

配役決めて散々もめていたが、どうにか決まり勇者ごっこを始めた子供たちを見ながら、ラッティは独り言のように言う。

「ええい、ヒューゴめ！そうりゅうれんがざーん！」

「これでとどめよっ！スナイプロアあ～！」

「ぐわああああ…。や、やられたあ…」

「わーい。ヒューゴをやっつけた」

…マント、剣…。それに白いタイツもはいていたような気がする。

ラッティは少年のじっと見ていた石像を見つめる。

5人目の勇者、リオン・マグナス。いつも「勇者ごっこ」では人気ナンバーワンの役だが…、髪型といい、服といい、下げている剣といい、あまりにも酷似し過ぎている！

(…まさか、ねえ)

少しでも「さっきのはリオン・マグナスじゃ…」なんて」思ってしまった自分を笑う。そんなはずは絶対にない。彼は100年も昔の人間なのだから。

Chapter4, 1000年の月日

4つの朽ちた剣と、砕け散ったレンズのかけら。それらが無造作に研究室の机の上に置かれている。ソーディアンの剣の細工は極めて精巧で美しい。コアクリスタルが破壊されてぼろぼろに朽ちてしまっているもの、1000年の間もったというのだからそれだけで奇跡と思わざるをえない。

そして1000年の昔、この世界を破滅に導こうとしたエネルギー結晶体神の眼。天界戦争の際に破壊され、今ではただのガラスの破片にしか見えない。

…この2つは学会に申告すればかなりの話題を呼ぶだろう。

「ソーディアンであった剣と、エネルギー結晶体であったガラスの破片」…として

彼…ライゼール・カリティスは机の上の発掘物を見ながら、深い深いため息をついた。

ライゼールが今回発掘されてくるであろうと踏んでいたのはこんなものではなかった。

正真正銘生きているソーディアンと、1000年のときを生きたそのソーディアンのマスターがああ遺跡に眠っているはずだったのだ。

彼はマリエール嬢の許可を得て、ヒューゴ・ジルクリフトの手記を読んだのだ。ヒューゴ・ジルクリフトが自分の息子をカーボナイト凍結し、その傷が癒えるまで眠りにつかせたことを知っている。その傍らにソーディアン・シャルティエを置いたことも。

最近、ようやく天界戦争決戦の地である、ダイクロフトへの道が開け、リオン・マグナスとソーディアン・シャルティエが日の目を見るときが来た！…と思ったその矢先だった。あの2人が裏切り行為をしたのは。

…間違いなく、ダイクロフトには1000年前の遺産が眠っていた。それをあの2人…マーシェ・ダーニルとライル・ライラスが横取りしたのだ。正確にはライル・ライラスが、だ。あの女は考古学などに興味はない…とライゼールは踏んでいる。

早いうちに取り返さなければならない。あれは今までの発掘品の中でも最高のものだ。

生きた遺産。

…その言葉がライゼールの頭からはなれずにこびりついている。一刻も早く取り戻さなくては、たとえ、どんな手を使ったとしても。

…マーシェがクレスタの自宅に着いたのは日没からかなりたってからだった。すっかり日は暮れ、空にはもう星が輝いている。

「絶対！！絶対リオンを外に出すなよ！！」

出かけ前に何度もライルが繰り返していたのを思い出した。ライルはせっかく見つけた最高の発掘物

に逃げられたくないのだ。

しかし、そういうわけにもいかない。マーシェはリオンの好きにさせてあげるつもりだった。だからマーシェはリオンは出て行ったものと思っていたのだが……。

「……ただいま」

リビング兼食堂のテーブルにリオンがじっと座っているのを見て少なからず驚いた。

「ひとりなのか？」

テーブルの上に灯したランプの明かりを見てもなしに見ながら、リオンはこちらを振り向かず問うた。そのパープルブルーの瞳に映るランプの炎もゆらゆらゆれている。

「どこにも、行かないの？」

逆に問い返すと、今度は少し自嘲ぎみな声になった。それでもこちらを見ようとはしない。

「…行くところ、ないからな」

ぼつり、と静かに言っただけの音がやけに重く響いた。リオンはそれ以上しゃべりたくなさそうだったが、マーシェはその沈黙に耐えられそうになかった。

「そ。じゃあ、ここにいればいいわ。」

「…ご飯、作るわ。おなか空いてるでしょ？」

一人のときよりも、静かな夕食だった。やはり、リオンはいっこうにしゃべろうとしない。押し黙ったままで、食べていると言うより同じような動作で食事を口に運んでいるだけのように見えた。…実際、そうだったのかもしれない。

押し黙っているとはいえ、戻ってきたということはそれなりにこの場所が必要だったから…勝手にそう解釈して居心地の悪さを我慢するマーシェ。

食事が終わって、マーシェがコーヒーを飲んでいるとそこでようやくリオンが口を開いた。

「あなたは、100年前のことをどれくらい知っている？」

言って、腰から下げているシャルティエをテーブルの上にごとん、とのせた。

「天上人の王と、ソーディアン勇者が神の眼をかけて戦って、勇者側が勝った。…あたしが知っているのはこのくらいよ」

『パートナーの方はずいぶん詳しいみたいだね』

シャルティエが口をはさんだ。どうやら彼(と呼んでいいかマーシェはわからなかったが)も朝のライルの質問攻撃を聞いていたようだ。

「ライルは考古学者なのよ」

「じゃああの本は全部、あいつの本か」

「あたしは本なんか読まないからね」

マーシェはライルが持っている本については何も知らない。マーシェが読めない字の本も持っている、それ以前に彼女は考古学に全く興味はなかった。

しかし、今だけ、少しでも本に目を通しておけばよかった、と思った。

『…ぼっちゃん。そういえばあの本、何が書いてあったんです？』

シャルティエが心配そうに問うた。するとリオンは立ち上がり、ライルの部屋から本を抱えて戻ってき

た。ライルがいたら見せてもらえるわけがないが、幸いライルは今夜、婚約者のところにいる。

その本を無言で開き、声に出して読むようあごで合図した。

「…？」

…黒のソーディアン・ベルセリオスの手先と成り下がったときの大富豪ジルクリフト氏の長男。彼もソーディアンマスターであったが、父の背中を追い、天上人の手先と化す。天上人の復活をもくろむも、勇者のソーディアンチームの前にあえなく敗退。まだほんの少年だったと言う」

読み進めるにつれてシャルティエの感情がすーっと引いていくのがわかった。目の前で本に視線を落としているリオンの顔も心なしが青ざめている。

「…これは なに？」

雰囲気を探るも問わずにいられない。マーシェが問うと、シャルティエが辛そうに、口を開いた…。

『これは…、これは、ぼっちゃんのことですよ…。100年前の、ぼっちゃんのことですよ…』

「…え？これが、リオンの…？」

ベルセリオスの手先、天上人の復活、そして、勇者の前に敗退。一瞬、たちの悪い冗談かと思ってしまったほどだ。

『ぼっちゃんは大事な人を人質に取られていて…従ったらこんな悲しいことに…。ほんとはぼっちゃんはこの…』

「シャル、余計なことを言うな」

以外にきっぱりとした口調でシャルティエを制するリオン。

「今いった通りだ。僕は100年前、天上人側に荷担していたことになっている。そこにいた人間ならそうとって当然だろう。僕は仲間を裏切ったのだからな」

またしても自嘲げみに言うと、口の端だけ上げて笑って見せた。笑ってはいるものの、マーシェの目に映るのは今にも壊れそうな哀れな少年。

「…あたしは、天界戦争でどんなことがあったか知らないけど」

『その戦争が始まる前にぼっちゃんはもう眠りについてたんだよね』

「あ、そうなの？」

…こいつ、馬鹿な女だ。一瞬だけマーシェを見たりオンの目がそう言った気がした。

『ぼっちゃんは』

シャルティエの言葉の途中で、いきなり振動と轟音が聞こえた！振動のショックでマーシェは椅子から投げ出され、床の上に転がって、強かに頭を打った。

『ぼっちゃん！！』

シャルティエの声が聞こえた。

「！！…これは…」

続いてリオンの声も。

「起きろ！寝ている場合じゃない！」

「別にあたしだって好きで寝てるんじゃない…」

ずきずき痛む頭を押さえながらどうにか立ち上がる。

「！！！！」

脳しんとうではないと思うが、くらり、と目の前が回ってそのまましりもちをついてしまった。

『これは・・・』

家が半分、きれいに消し飛んでいた。ライルと、マーシェの部屋のあった部分がそっくりなくなっている。常識で考えられることではない。しかし、心当たりはないでもない気がした。

(これだけの力を持っていて、あたしたちに恨みを持つような人物と言えば・・・)

頭に真っ先に浮かんだのが、王国お抱えの考古学者ライゼール・カリティスだった。

ライゼールはライルに負けず劣らずの考古学マニアだ。もし、古代遺跡・ダイクロフトに生きた発掘品があることを知っていたとしたら・・・。

(だからって・・・さすがにここまでは・・・)

元はライルの部屋であったであろう場所を見下ろしながら、急いで頭を働かせる。

(・・・ほんとに、今日ライルいなくてよかった)

しかし、ほっとしてもいられない。これだけのことが出来る相手だ。次に何をしてくるかわかったものじゃない。

「リオン！シャルティエ！こっち！！」

・・・とりあえず逃げるしかない。

走りながら考える。

ライゼールがリオンたちの存在を知っていたとしたら、ここまでしてリオンたちを手に入れようとする必要があるのかを・・・。

(・・・ライゼールならやりかねないわね)

ライゼールとライルの性格はよく似ている。・・・それ故に反発するのだろうが。発掘物が関わると一歩も引かなくなるところ、発掘物が関わると後先考えなくなってしまうところ・・・。

とはいえ、今回の落ち度はこちらにある。マーシェは規則を破り、発掘物を王国に届け出なかったのだから。王国の管轄にあるライゼールにはり倒されても文句は言えない立場なのだ。

そして闇の中で走りながらため息。

(なんて厄介なことしたんだろ)

・・・しかし、後ろを走るリオンを振り返り、思い直す。

(リオンを、あのまま発掘物として届けるよりはいいわよね・・・)

その後ろを走るリオン。自分は関係ないはずなのになぜかマーシェの後ろを走っていた。

しかし、行く当てもないので仕方がないといえば仕方がない。しばらくこの女に付き合えば100年前のことも少しはつかめるかも知れない。

そんなことを考えながら走っていると、ふいにシャルティエの声が聞こえてきた。

『・・・ぼっちゃん』

「なんだ」

『……』

なにか言いたそうなのに、ひどくためらっている、…そんな感じだった。

「あの女に、聞かれたくない話か？」

リオンはチラッと前を走るマーシェに目を向けた。彼女との距離は 5 メートル弱。シャルティエの思念が強くなければ聞こえる位置ではない。

『いえ、いずれは聞いてもらいますけど。…先にぼっちゃんに』

「一体何の話だ」

じらされて少し機嫌の悪くなるリオン。…短気だ。

『…運命の、話です』

…同時刻。ダリルシェイド、フュステル家。

ライルはマリエールと食事を終え、食後のコーヒーを飲みながら最近の報告をしていた。

「で、船途中でオレがさぁ…」

テーブルをはさんで反対側ではマリエールが幸せそうに微笑んでいる。給仕をするメイドはいない。今日は食事の支度から全部マリエールがやったのだ。

マリエールはくるくる表情を変えながら真剣にライルの発掘話に耳を傾けている。ライルも、一生懸命聞いてくれる相手がいるからさらに熱をこめて話す。はたからみて、結婚も秒読みの幸せそうなカップルにしか見えない。

…しかし、突然ライルは言葉の途中でがっつりと黙り込んでしまった。まばたきひとつせず宙に視線を漂わせたまま身じろぎひとつしない。

「ライル？」

呼んでも返事はない。心配になって肩を軽くゆすってみる。…それでも反応はない。

「ねえ、ライル! どうしたの!？」

叫び声を上げてがくがくと肩をゆする。…しかし当然と言うべきか、返事はない。身体はマリエールが揺らすのに従ってがくがくと人形のように動くだけ。

脳の血管が切れて、いきなり廃人になってしまう病気があるというのをふと、思い出した。

嫌な予感と悲しみが同時に襲い来る。

「ライル! ねえ、なんとか言ってよ! ねえ!!」

「マリエールお嬢様、どうなさいました？」

彼女の叫び声を聞きつけたらしく、メイドの一人が部屋の中に入ってくる。

「ライルが…いきなり…」

それしか声にならなかった。後はかすれて泣き声の中に混じてしまった。マリエールは入ってきたメイドにしがみついた。

「ねえ、ライルは…」

またしても突然、…今度はいきなりはじかれたように立ち上がった。ライルの座っていた椅子は後ろに吹っ飛ばされてしまう。

「!？」

立ち上がったかと思うと、今度は機械が動くかのようにぎこちない足取りで歩き始めた。マリエールが袖を引っ張ろうと腕をつかもうと全く戻る気配はない。

「ライル! ? いったいどうしちゃったの？」

メイドも一緒にライルを引き止めようとしたが全く無駄に終わった。ライルはなにかに引き寄せられているかのようにどんどん進んでいってしまう。もはや引き止める手立てはない。

『ライル、発掘って危険は無いの？』

『発掘できるなら別にオレは危険なんて怖くないね』

『… 待ってる人の身にもなってよ』

『古代のものだからなあ ~ … 呪いとかには十分注意してるけど』

… 呪い。

その言葉がマリエールの頭をかすめた。

今回とてもすごいものを発掘した、と言って喜んでいていたライル。考古学を根底から覆す、とさえも言っていたが、どんなものを発掘したかは教えてくれなかった。

まさか… それがライルになにか悪い影響を及ぼしたのでは…。

… 昔からライルはマリエールとの身分違いの恋にずいぶん悩んでいたのだ。だから自分は考古学の権威になってマリエールにふさわしくなる… ライルの口癖だった。

もともとマリエールは身分など気にはしていなかった。… 上の身分の人間は誰もそういうのだが。

ライルが考古学に熱を上げているのにはそういった理由もあったのだ。

(私のせいで、ライルが…)

慌ててライルの消えたほうへ追ってみるが、もうとっくにライルはいない。

「運命、だと？」

『はい、… そうです。ぼっちゃんは運命って信じますか…？』

100年前、地下洞くつでスタンたちに負けたときのことを思い出してしまった。… できるだけ思い出さないようにしていたはずなのに。冷たい水が押し寄せてきて…、濁流の中で自分の名前が絶叫されるのを聞いて。… 自分はこの世でただ一人の愛しい人の名を呼んで。

こうなる運命だったとあきらめた瞬間のことだった。

自分の力ではどうにもならない状況に陥ったときに、その状況を簡単にあきらめるための言葉だと思っていた。それを素直に伝えたと、シャルは一瞬黙った。

『違うんです、それは… 違うんです。あきらめるための言葉じゃないんです… 運命は。前向きに考えるための言葉なんです』

腰に下げられたまま、シャルは一生懸命にしゃべる。しかし、

「なにが言いたい」

シャルの言いたいことはリオンには全く伝わらないようだ。

『ぼっちゃん。もうここまで来たからはっきり言いますけど』

「リオン！そっちじゃない！」

かなり先を走っていったマーシェが戻ってきて違う方向に行こうとしたリオンを引き止める。(余計なことを・・・)と思うものの一応彼女の後をついていく。

『…あの人にも聞いてもらわなきゃ。ぼっちゃん、どこかゆっくり話せるところがないか、あの人に聞いてみてください』

「おい、シャルなんであいつにも話す必要があるんだ」

『....』

それっきり黙りこんでしまった。マーシェと、どこかゆっくり話せるところにかない限り、シャルは口を開かないだろう。

仕方が無い。リオンは少し走るスピードを速めてまた小さくなりかけていたマーシェを追った。

『…ぼっちゃん。やっぱりあの時ぼっちゃんは、スタンたちと相対する運命にあったのかも知れません。…それで、ヒューゴに眠らされて…100年後にこの人の手で目覚める。…全部、全部決まったシナリオが動いているだけなのかも知れないですね。その決められたシナリオのこと、運命って言うんですよ…。ぼっちゃんには辛いことばかりかもしれないですけど…乗り越えましょう。…ぼくはいつでも、ぼっちゃんの味方ですから』

一方ダリルシェイド、セインガルド城の研究室にいるライゼール。ダイクロフトからの発掘品であるという、4つのソーディアンとを前にぼんやりと考え事をしていた。

天界戦争のことを書いた文献には大抵ソーディアンは6本出てくる。それに最終決戦の地に6本のソーディアンが集まったことは考古学をかじったことのあるものなら誰でも知っていることだ。

…それなのに、今回のダイクロフトの発掘では4本のソーディアンしか出てこなかった、と発掘屋の2人は言っていた。それから考えられるのは…やはりライルが自分の研究のために発掘物を隠ぺいした、と言うことだ。おそらくは生きてるであろう、リオン・マグナスとソーディアン・シャルティエを、だ。

ならば、残りのもう1つのソーディアンはどこへ消えた？

現在、ライゼールの元へ届けられているソーディアンは、ディムロス・アトワイト・クレメンテ・イクティノスの4つだ。リオン・マグナスとともにシャルティエがいると考えれば、残るは…ベルセリオスだ。

ベルセリオスは天界戦争で、天上人であるミクトラン側について、…最終決戦の際に破壊されたはず。確かな文献は無いが、あの戦いでコアクリスタルを破壊され、死んでいるはずだ。

ベルセリオスは死んでいるはず。

…なのに、なぜか嫌な予感が頭をもたげる。

ふいにライゼールは立ち上がり、椅子の背中にかけておいたマントを手に取った。

…今夜ライルはフュステル家にはいるはず。気になることは確かめなければ気がすまない性分だった。

マーシェの見つけたゆっくりしゃべれる場所、とはダリルシェイド行きの夜間馬車だった。山を迂回す

るルートなので時間はかかるが順調に行けば夜明け前にはダリルシェイドに着く。

夜もふけてきたせいか、乗客はマーシェたち以外見あたらなかった。当然、いないほうが好都合ではあるのだが。

…馬車に乗って間も無く、話の口火を切ったのはシャルティエだった。何も知らないマーシェに、100年前何があったのかを話し始めたのだ。

リオンの家族のこと、仲間のこと、…そして母親代わりになっていた女性のこと。

マーシェはただ黙って耳を傾けていた。初めは必死にシャルティエを止めようとしていたリオンも、あきらめたらしくマーシェの向かいの席で目を閉じ、黙り込んだ。

操られた父親にいいように使われ、孤児として捨てられていた姉と戦う羽目になったこと、仲間を裏切らなければならなかったこと、…そして、最後、自ら散る運命を選んだこと…。

シャルティエが口を閉じた後、ついリオンを見てしまった。

腕組みをしたまま黙り込み、じっと動かない。眠っているようにさえ見える。何を思い、何を考えているのだろうか。

正直、シャルティエの話にはわかには信じがたいものだった。同じくらいの年のこんなに華奢な細腕の少年が、そんなに辛い人生を送ってきたとは…。

しかし、リオンの輝きの失われた瞳を見れば納得がいく。ぼろぼろに壊された心がそのまま瞳に映っているかのようだ。その心は…癒しようが無いほど病んでいたのだろう。100年前、この少年を救おうと考える人間は、いなかったのだろうか…。

「シャル、話は終わったんだろう？早く本題に入れ」

リオンが不機嫌極まりない口調で言った。

『ベルセリオスが、生きてるんです』

『…1000年前は、力不足で引かざるを得なかった。

…100年前は、あいつらに阻まれ、再び眠る羽目となった。

しかし…しかし今度は、あいつらはもういない。今度こそ、わたしの君臨する番だ。

もう誰にも、邪魔させはしない』

「なんですって!？」

「なんだと!？」

図らずも、マーシェとリオンの声が八もる。とはいえ、声を荒げずにはいられない。言った当のシャルティエからもしゅん…と落ち込む雰囲気伝わってこないでもない。

『やつはコアクリスタルが生きています。…だから、ほく同様100年の間生きていることが出来た。そして、やつは今、…新しいマスターを見つけて…。あの時の野望を再び果たそうとしてるんです…』

重苦しいシャルティエの声。

「待って、新しいマスター……って……」

かすれたマーシェの声にシャルティエの声が重なる。

『…ライルってひとだよ』

…気がつく、目の前は真っ暗だった。あるのは闇と…声だけ。

多分、遺跡の中でソーディアンを手にしてからだ。…この声が聞こえているのは。まさか、このソーディアンも生きていたのか…。

こいつは…ベルセリオスはよみがえってなにかをやらかそうとしてるんだな…。オレの身体を使って。

オレは、マリエールに会いに行くはずだったのに。それにさっきまで一緒にいたはずのマーシェもいない。

誰もいない…。誰も。

「ちよっ…、ちょっと！ライルがマスターってどうしてなのよ！！？」

マーシェたち以外に乗客はいない、夜中の馬車。シャルティエの言葉にマーシェは激昂し、思わず立ち上がった。シャルティエを怒鳴りつけてもどうにもならない。…わかってはいるが、とめられるはずもない。

『…語弊があるね。…マスター、というよりは操られている…といったほうが近いかな』

シャルティエの言葉の途中で、リオンが小さく息を呑む音が聞こえてきた。そこでマーシェはっと気付く。リオンの父親は、かつてあのソーディアンに操られていたのだから。

『おそらくライルにはベルセリオスの声が聞こえていたはずだよ。…キミに何か言ってなかった？』

シャルティエの問いに、マーシェはゆっくりとかぶりを振った。

(ライルも、あの黒いソーディアンは死んでいると思っていたはず…。…そのはず…。…だけど…。…ダリルシェイドに行くときにいきなり…)

「いきなり、ソーディアンは4つしか見つかなかったことにしてくれって…！！」

半ばかすれた声で言うマーシェ。その声に助けを求めるような響きが混じっているような気がするのは…気のせいではないはず。

リオンにもわからないわけはなかった。マーシェがライルのことをどう思っているのかどうか。しかし、ここであいつを黙って見逃すわけにはいかないのだ。100年前自分を、仲間を、家族を、…そして、マリオンを不幸に陥れたあいつを。

「決まりだな。ライルはあいつの…ベルセリオスの手の中にある」

本当は、『ベルセリオスはライルの手の中』にあるのだが力関係を考えると、リオンの表現のほうが正しい。マーシェも何もいえずに黙ってしまった。

「…ライルが、ねえ～…」

自分にはシャルティエの声が聞こえ、リオンを助けようと思った。同じようにライルにはベルセリオスの声が聞こえ、彼はベルセリオスの野望を助けようとしているのだろうか…。

(…皮肉すぎる)

心の中で、ぼそとつぶやく。もっと悲しい運命を経験しているリオンの前では、到底口に出せそうもなかったが。

『ぼっちゃん、やりますか』

シャルティエの悲壮ともいえる声が聞こえ、それにリオンは力強くうなづく。

「当然だ」

ダリルシェイドまで、後少し…。

Chapter5 コアクリスタル

夜も明けかかる午前5時。新しい太陽の光を浴びながらもまだ残る薄闇に紛れて、するりとひとつの影が動く。右手に握るのは抜き身の剣。刀身はどこまでも深い不気味な黒。

マリエール・フュステルが恋人の身を案じ、放った私兵たちもそろそろ青年を探すのを打ち切りにした頃。ずっと潜んでいた陰が動き出す…。

「リオン、ダリルシェイドに着くわ」

仮眠を取っていたリオンをマーシェが起こす。眠りが浅いらしく、リオンは軽く肩を揺すただけで目を覚ました。

『100年ぶり以上…ですね』

馬車の窓からダリルシェイドの町並みを覗くリオンに向かって、シャルティエが懐かしそうに言った。

「…そうだな」

そっけなく言うリオンの口調も心なしが懐かしそうだ。

「ダリルシェイド、故郷なの？」

「ああ。僕はセインガルドの客員剣士だったからな」

お前には関係ない…冷たくあしらわれるかと思いきや、返ってきた答えは以外にあったかい。

「客員剣士！？その歳で！？…実はすごいね～…」

マーシェが素直に感心すると、リオンは恥ずかしそうな顔で少しだけうつむいた。…どうやら誉められるのには慣れていないらしい。いつもはきちん、としていて自分よりも年上にさえ思わせるが、こういうところで歳相応の反応が返ってくる。…マーシェは少しだけ笑った。

「なに笑ってるんだ。気味の悪いやつだな」

「(ちょっとムカ)…別に」

…そうこうしているうちに馬車は止まり、一行はダリルシェイドに到着した。

まだ日が出ていないため、薄暗く、寝静まっている街はなんとも不気味だった。しかし、それでもリオンとシャルティエは懐かしいらしく、あそこは変わっていないだとか、何とかの屋敷はどこにあったとか100年前のダリルシェイドと比べている。

「…余裕ねえ。これからベルセリオスを迎え撃つってのに」

腕組みをしたマーシェが半ばあきれ、半ば楽しそうにリオンとシャルティエのやりとりを見る。

「…あれ、…ヒューゴの屋敷じゃないのか？」

ここはダリルシェイドの北西。立派な塀に囲まれたダリルシェイドで一番大きな邸を指差してリオンがマーシェに問うた。

…ヒューゴ。確か、リオンの父親の名前。ってことは100年前はリオンの…。

「あ、あそこはねライルの…」

ライルの…言いかけたところで口が止まった。朝の空気の中に今までとは違う異質な気配が混じる…。

「…オレが、なんだって？」

第三者の声はふいに聞こえた。今まで2人(+シャルティエ)が全く気にしていなかった方向から聞こえたのだ。一番反応が早かったのはリオン。声の聞こえた方…上を向いてシャルティエを腰から引き抜く。

「ライルっ!？」

ライルはマーシェたちの真上に浮かんでいた。

…当然人間が空に浮かぶことなど出来るはずがない。その証拠にライルの右手には抜き身の剣がぶら下がっている。どんな光も吸い込んでしまいそうな…無明の黒。ソーディアン・ベルセリオスだ。

「貴様か…、貴様が…っ」

ちゃきっ!とシャルティエを構え、リオンは剣の届かない位置にいるライルに向かって威嚇する。その瞳は怒りで燃えている。しかも、リオンの剣の間合い外から、高みの見物をしている…というもさらに怒りを買っているようだ。

「たった一人で、オレに勝てるとでも？」

「貴様っ!降りて来い!!!」

超然とした態度にさらに激昂するリオン。しゅっ!とシャルティエを引くと目を閉じてなにか口の中でぶつぶつ言い始めた。それをライルは片眉を上げて見るだけ。

あれはベルセリオスを手にしたライルなのだろうか。それともベルセリオスがライルを操っているのだろうか。

100年前、リオンは自分の父親が操られていることに気がついていなかったらしいが…、それが納得出来た気がした。パートナーとしてずっと一緒に戦ってきたマーシェでさえも普通のライルに見えるのだから。

…そこで、かろうじて気がつく。

(ライルは、空飛べないよね)

そんなことで見分けをつけるなんて。マーシェはため息をついた。

マーシェがため息をついている間にも、リオンは目を閉じ精神集中をして口の中で呪文を唱えつづけていた。

…やがて、リオンの引っさげているシャルティエに不思議な光が灯った。

薄闇の中、ほんのかすかに輝く不気味な光。白金の刀身とは対照的に、黒く輝く闇の光……。リオンの呪文詠唱の時間と比例してその光はどんどん強くなっていく。…突然、リオンはシャルティエを天に突きつけ、

「デモンズランスっ！！」

シャルティエの刀身はきいん！と輝き、その光と同調するように天の一点も光を放った。その一点から注ぐひと筋の暗黒の光。それは速さと強度を増し、まっすぐにライルに突き進む！！

(…ライルが！)

あわてるマーシェとは対照的に、ライルはリオンの一連の動作を観察でもするかのようにじっと見ていた。

『…ああ…』

暗黒の光……。リオンの言った「デモンズランス」がライルに直撃する瞬間、シャルティエのため息ともつかぬ、絶望の混じった声が聞こえる。それは、光がライルに突き刺さるのを自信ありげに見ているリオンには聞こえていないようだ。

そして、光はリオンの思惑とは逆に(シャルティエの思惑通り)ライルのすぐ近くにきてその力を失ったかのように掻き消えてしまった。

「！？…なんだと？」

その瞬間、マーシェはいきなり後ろからぐいと引っ張られ、そこに居合わせた人たちが誰も気付かないうちに茂みの中に引きずり込まれてしまっていた。

騒ごうにも口をしっかりと押さえつけられていて声を出せない。暴れようにも全身をしっかりと押さえつけられていて動くことが出来ない。

「…静かにしろ。私だ」

聞き覚えのある声が頭の上から降ってきた。それを聞いてマーシェはようやく大人しくなる。すると、ようやくライゼールはマーシェを放した。

「いったい何の真似？」

開口一番、ライゼールを責めたてるマーシェ。

「それはこっちのセリフだ。…お前ら、なんて事をしてくれたんだ」

「晶術が、効かない……。シャル、なんでなんだ？」

慎重にライルとの間合いを取りながらシャルに問うリオン。相手は、リオンの使える最強の晶術をかすりもしなかった。これにはさすがのリオンもあせる。

『多分…たぶんですが、やつの方が強いんです。…ぼくよりずっと』

申し訳なさそうに、シャルが言った。こんなに落ち込まれては責めようがない。リオンは小さく舌打ちをした。

『やはり、貴様はその程度か。…それで私を止められるとも思ったのか？』

ベルセリオスににあざ笑われ、シャルは痛いところをつかれたかのように押し黙ってしまった。

『まあいい。能力はどちらが上か、嫌と言うほど教えてやろう』
そう言うとライルはやっと地面に降りてきて、ベルセリオスをリオンに向けてまっすぐに構えた。

「なんのこと？」

マーシェはしれっととぼけた。…もうこうなったら知らぬ存ぜぬで通すしかない。ライゼールは敵に回すとウザいが、王国を敵に回すよりはずっとましだ。

「今までお前と一緒にいたあのガキ、あいつが何者か知っててかばっているのか？」

リオンが、何者か…。

以前の…、考古学に全く詳しくないマーシェだったらわかるはずもない質問だ。しかし、100年前の話もたくさん聞いた。マーシェはその質問の意味を一瞬にして理解した。

「あいつは…リオン・マグナスは天上人側についていたんだぞ。…敵だったんだ。もしかしたら、100年後によみがえって再び地上に襲いかかるために生かされてたのかもしれないんだ。なぜ、そんなやつをかばう…？」

ぎいんっ！！

茂みの向こう側から、金属のぶつかりあう音が聞こえてきた。…リオンとライルだ。

確かにリオンは100年前、勇者のソーディアンチームを裏切った。それは彼の本意ではなかったはず。現に、リオンは今、世界を守るために戦っているのだ。かつては無理矢理従わされたソーディアンと。

「違う、リオンは敵なんかじゃ…」

「じゃあなぜライルと戦ってる？」

どうやらライゼールは、ライルが敵であるリオンを止めようとしている、とカン違いしているらしい。

(カン違いもいいとこだわ)

マーシェは思わず頭を振って、

「違うのよ、ライルがまだ生きてるソーディアンに操られてて…、それをリオンが止めようとしてんのよ！！」

つ、強い…。

剣の腕は互角のようだった。しかし、剣がぶつかり合ったときの余波を、シャルのほうがたくさん受けてしまうらしい。「シャルよりベルセリオスのほうが強い」せいなのだろうか。それとも長期戦に持ち込まれたために起こる体力不足か、体格差か。…リオンに不都合な要素はいくらでもあった。しかし…

…ここで退くわけにはいかない。あの時、100年前ヒューゴを操っていたとき、僕はこいつに勝てなかった。マリアンを盾にされていたせいもある。だけど…それを抜きにしても、僕はきつと勝てなかった。だから…。

「今度は負けるわけにはいかないんだっ！」

一気に形勢を切り返すつもりで大きく踏み込む。しかし、向こうもそれを予測していたらしく、リオンの間合い外まで跳んで(飛んで?)逃げてしまった。

「これじゃきりがない…。シャル、どうすればいい…。？」

『…？ぼっちゃん！落ち込んでる場合じゃないですよ！あいつ、晶術を！！』

手の中でシャルが叫び声に近い声を上げる。跳んで逃げたライルに目をやると、ベルセリオスを高く掲げ、なにやら呪文を唱えているところだった。

『発動する前に止めないと！！ぼくたちは助かって…ダリルシェイドが…！！』

第三者の声は突然、割り込んできた。

「そうよね…。良かった。ライルがおかしくなったんじゃないからね」

マーシェとライゼールがあわてて振り返ると、そこには憔悴した顔のマリエールが立っていた。あまりに突然気配もなく現れたのでさすがのマーシェもすこし驚いた。

「ま、マリエール！？なんでここに？？」

「…。」

マーシェが問うも、マリエールは無言のままくりときびすを返し、がさがさと茂みを出て行った。

…茂みの外ではリオンとライルが激戦中。

「マリエール！！危ないわよ！！」

間に合わない！！！覚悟した瞬間、突然、リオンの前に一人の女性が立ちはだかった。

「ライル！！私よ！！マリエールよ！」

ライルの恋人だろうか。…恋人が出て来れば操られたライルはベルセリオスの呪縛から逃れ、元に戻るかも知れない…。しかし、危険すぎる賭けだ。

「どいてろ！むやみに近づくな！死んでも……。」

女を押しわけ、再び前に立ったリオンは思わず絶句した。

…風になびく、黒い髪。月の光を受けて、きらきらと輝く瞳。透けるような白い肌。見覚えがある、そんな程度のものではない…。永遠に忘れられない女性の面影が、マリエールと名乗った彼女にはある。

マリアンにそっくりだった。

「お願いライル！そんな剣捨てて！！私のところに帰ってきて……！」

「マリエール！！危ないわよ！！」

必死に訴えかけているマリエール、茫然自失となってマリエールを見ているリオン。そして…、マリエールの登場によりいきなり動きを止めたライル。…マーシェは最初にリオンの様子に気がついたようだった。

「…リオン、どうしたの」

マリアンの子孫であることは疑いようもなかった。ひと目でわかるくらいにマリアンそっくりなのだ。

『…ぼっちゃん』

シャルがリオンにだけ聞こえるくらいの声でささやいた。リオンを慰めるような、優しい声だった。

「ああ」

そうとだけ言って、こくんとうなずく。そのひょうしに涙がこぼれそうになってしまった。100年の間にずいぶん涙腺が緩んでしまったようだ。涙がこぼれないように、ぐっところえる。

その間にもライルの異変は進んでいた。かくかくと不気味に震えるライルは、ライゼールとマリエールが見ている前でゆっくりと地面に落ちてきた。

「ライル!!」

その身体をしっかりと抱きとめるマリエール。ライルの手からベルセリオスは落ち、途端にまもっていた光を失った。

「どうなったの？」

リオンに気を取られていたマーシェがライゼールに問う。

「…マリエールの参上で操られてたライルがベルセリオスと離れようとしたんじゃないのか？」

…とライゼール。学者のわりには簡単な解説で済ませようとする。ずいぶんあっけない終わり方にマーシェは腑に落ちない、といった様子で首をかしげた。

『ぼっちゃん、あいつの傍に行ってください。コアクリスタルが破壊できるか見てみます』

「あ、ああ…」

リオンもあまりにあっさり終わったのでなんとなく納得いかないようすが…、やつが倒れたのならそれはそれで問題ない。リオンはマリエールの傍らに落ちているベルセリオスの近くにかがみ込んだ。

『隣りに並べて置いてください』

「…大丈夫なのか？」

『大丈夫ですよ。さ、早く』

シャルの指示どおりにベルセリオスの隣りに、シャルを並べておいた。一瞬、シャルが操られないか、心配になったがそんなものは不要だったようだ。

…しかし。シャルの様子がおかしい。

「どうした？シャル」

なにやら言い合いをしていたマーシェとライゼールもリオンと同じようにしてかがみ込んだ。

『…おかしい、……こいつ、コアクリスタルがないんですよ…』

“ うんめいのおはなし ”

やわらかな風を受けて、ふわふわと花が揺れる。

「…自分の墓参りをすることができるなんて…きっと僕くらいだろうな」

ダリルシェイドの北の丘。優しい風の吹く丘の一番上にそれはあった。「Lion・Maganus…sleeping here」と彫られた大きめの石。誰が作ったものなのか、考える必要はなかった。

リオンはそれの前にかがみこみ、静かに手を合わせた。

「…リオン、これからどうするの？」

『ぼっちゃん、これからどうします？』

シャルティエとマーシェが同時に問うた。そのマーシェは心なしか元気がなく見える。…見える、という

うよりは実際元気がないのだが。

「… ゆっくり100年後の世界でも見て回るか」

『それもいいですね。マリアンさんみたいに子孫に会えるかも知れないですね』

シャルティエの言葉にゆっくりとうなずくと、今度はマーシェのほうに向き直った。

「すまなかったな」

頭を小さく下げて、素直に謝る。100年前にはけっして出来なかったようなことだ。…しかし、リオンは100年の時を経て生まれ変わったのだ。今度は正直に生きれる。

「いいの。リオンもシャルティエも元気になったし…、ライルも元に戻ったしね」

確かにライルはベルセリオスの呪縛から逃れ、元に戻ったがいろいろと問題も残った。

…そのひとつが、リオンとシャルティエだ。

リオンもシャルティエも、言ってしまえば最高の発掘品。生きた遺産、なのだから。当然セインガルドがそれを見逃すはずはない。一度セインガルド城に入れられてしまったところを、マーシェは逃がしてしまっただ。おかげで、現在マーシェ、リオンには第一級の指名手配がかけられている。

もうひとつ、コアクリスタルの無いベルセリオスに関してはシャルティエでもわからなかった。ベルセリオスはセインガルドに置いてきた。これはもう王国に任せるしかないだろう。

「あたしは… いったん故郷に帰るわ。

…また、会えるといいわね」

マーシェがちよっと笑って言う。リオンはさっ、と髪を払い

「僕はもう会いたくないな」

『…ぼっちゃん…』

シャルティエが心底あきれたような声をあげ、マーシェとリオンは思わず笑ってしまった。

「じゃあ、ここでお別れね」

「… ねえねえラッティ～！勇者のお話して～！」

子供の一人が大声を出して、ラッティに「お話」をせがんだ。この孤児院では「勇者のお話」は、「勇者ごっこ」の次に人気がある。それはひとえにラッティの先祖であり勇者の一員だったルーティ・カトレットの影響だ。

「お話聞きたい」

「わあい、ボクもーっ」

あっという間にラッティの周りに子供たちが全員集まった。

「…しょうがないわねえ…。今日はどこからだったかしら？」

子供の一人が持ってきた椅子に座り、前回の続きを思い出す。

「あたしわかった！リオン・マグナスが死んじゃうとこよ！！」

「そうだ！！リオンが死んじゃったんだ～～」

「…はい、静かにね」

ラッティが言ってぱたぱたと手をたたくと一瞬にして孤児院のホールは静かになった。彼女はそっと目を閉じた。

「…リオンは、勇者たちと戦うハメになってしまい、倒されて、島と一緒に沈んじゃった…んだっわね。じゃあ、その続きから。今日はリオン・マグナスの話しましょう」

リオンは、死ななかった。死ななかった、というよりは死ねなかった、と言うほうが正しいかもしれない。自分の父親であるヒューゴによってカーボナイト凍結されてしまったのだ。ヒューゴの…というよりは彼を操っていたミクトランの意思であったのだろうが。とにかく、リオンは眠らされダイクロフトの奥へと入れられた…。

子供たちの輝く目が「早く早く」とせかしている。

「…そう、それでねミクトランは再びリオンを利用しようとしたのね。…だけど、その前にミクトランは勇者たちによって倒されてしまう。…そのままリオンは眠り続けて…」

100年後に目を覚ますことになる。謎の復活を遂げるソーディアン・ベルセリオスと戦うために。

「100年後、ちょうどリオンが目覚めるころ、ベルセリオスもなぜか目覚めるの。もう死んでるはずなのに」

野望を抱くベルセリオスをリオンはみごと敗るものの、なぜベルセリオスが復活したのかはわからない。

「一度は死んだはずのベルセリオスがよみがえったってことは、…何度でも生き返るかも知れないってことなの。…だって、なんでベルセリオスが生き返ったかはわからないから」

「え……。…ここにもベルセリオス来るかなあ……」

「やだやだコワイ!!!」

子供たちはいっせいに声を上げ始める…なかには泣き出すものまでいた。それを見てラッティはあわててその場をとりなす。

「大丈夫よ。…勇者がいるじゃない。リオン・マグナスがいるわ。ベルセリオスがよみがえっても、きつとリオンが助けに来てくれるわよ」

言って微笑むラッティを見て、取り乱していた子供も幾分落ち着く。

「…それならあたし、ベルセリオスがきてもいいな」

ラッティの一番近くにいた子供がぼつん、と言った。

「はい。今日のお話はここまでよ。さ！外で遊んでらっしゃい」

…作り話ひとつひとつに一喜一憂する子供たちと一緒に生活していると、自分まで勇者の作り話を信じてしまいそうになる。すべて、作り話だ。勇者・ルーティが帰らぬ人となった弟を懐かしんで作った話…作り話

昨日で天界戦争が終結して100年になる。

ルーティの作った話によると、ベルセリオスとリオンが復活し対決したはずの日だ。…そんなこと、絶対ありえるはずはない。これはルーティの作った「運命の話」なのだから。

しかし、どうしても、昨日の昼間孤児院に現れたリオン・マグナスそっくりのあの少年のことが、頭から離れない。

END